

## トラベルとトラブル

### 2) ドクターコール

「お客様の中でお医者様はいらっしゃいませんか？」

夢なのか、現なのか・・・、ドクターコールがどこか遠くの世界のここのように聞える。ウトウトのまどろみ状態から目覚めるまで、ほんの一瞬だったのだろうが、それが随分と長く感じられたのは強い睡魔に襲われていたからだった。

仕事納めの12月29日、折りから風邪も流行っていたため外来は混雑し、診療は夕刻の6時を過ぎても終わらなかった。書類整理と荷物の準備に夕食時間を惜しみ、床に入ったのは夜半過ぎ、3～4時間ほどの仮眠後に早朝のバスで成田へ、昼過ぎには機上の客となっていた。

海外への旅の出発はいつも慌ただしく、日常から非日常へ、動から静へと突然の変化とともに始まる。現役中であってみればこれは仕方のないことだが、しかし、定番となった出発時のこのスタイルによって、日常が画然と断ち切れ旅の印象がより深まるのではと、そんな風に思えるようになったのは何時のころからだろう。狭い座席でシートベルトに縛られ身体は窮屈だが、ここ数日の慌しさは嘘のように消え、パソコンやケータイもなく、どんな旅になるだろうかと未だ見ぬ地への期待が膨らんでいく。緊張の解けたそんな身体に一杯のワインのめぐりは早く、睡魔に心地よく身をゆだねていたのだった。

「急病人が出ました。お医者様はいらっしゃいませんか？」

再度なのか、再々度のコールなのかは判然としないが、ぼんやりした不良の視界が開けるように、夢遊の状態は次第に現実の世界に戻されていった。

「ひょっとすると自分が呼ばれているのかも？」

思わずハッとしたのは、今まさに対応を迫られているのは自分ではないかと気づいたからだった。

さて、どうしよう。コールに応えるか、それとも知らぬ顔の半兵衛ときめこむか・・・。ここは職場ではなく空の上、私も日常を離れて旅に出た乗客の一人だ。それをまた仕事だなんて・・・、第一何もないこんなところで例え診断できても・・・、そう、丸腰の医者は陸に上がった河童、お手上げのグリコの看板だ。それに少々酔ってもし・・・、そもそもどんな急病なのか、どの程度重症なのか・・・、出来ることと出来ないことがあるし・・・。脳卒中なのか心筋梗塞なのか、あるいは産気づいた妊婦？ もしお産だったらどうしよう、お産なんかインターンのとき以来立ち会ったこともない・・・、もし命に関わるような状態で成田に引き返す決断を迫られたら・・・、このエアバス機は海外で正月休みを楽しもうと何百人もの乗客でいっぱいだ。その人たちのスケジュールはめちゃくちゃになってしまいうし、それに国際線で緊急着陸すると燃料代や乗客の飲食代、ホテル代など、そのコストはおよそ1000万円になると聞いたことがある・・・。

どうしよう、どうしようかと、心は千々に乱れて堂々に巡る。他にドクターがいて名乗

りを上げてくれるかもしれない、いやきつといるだろう、自分が出ていくことはあるまい、もうちょっと待ってみよう、ここは様子見だと、そう自分に言い聞かせた矢先、またも「お医者様は・・・」のコール。機内はシンと静まり、脇の通路をキャビンアテンダントが慌しく走っていく。乗客全員が固唾を飲んで、次の展開をじっと窺っている感じだ。そんな張りつめた雰囲気にはたたまれなくなって、私はついにもそもそと立ち上がってしまった。

周囲の視線が何やら冷たく感じられたのは、私の遅い手挙げに「なぜもっと早く・・・」と、皆が思っているのではと邪推したからだった。周囲の客は私が医者だとは知らないから、ここは狸寝入りでやりすごすこともできた。しかし、他人は騙せても自分は騙せない。しかもツアー客のリストを持った添乗員は私の職業を知っている。もちろん個人情報だからそれを同行の客に漏らすことはないだろうが、これからの数日間、彼は私をどう見るだろうか。そんな思いを無視できない小心さや見栄心が、私の腰を上げさせた一因でもあった。

どうか大したことでないようにと念じつつ、足早に狭い通路を現場へと向かう。うつむき加減で後方の現場に向かったのは、乗客の正面からの“痛い”視線を避けるためだった。現場に近づくと2～3人のキャビンアテンダントがさっと身を引いて、病人の前に空間ができた。

「お医者様ですか？ よろしくお願ひします」

アテンダントの顔にほっとした安堵の表情が浮かぶ。「ええ」と頷いた私は、彼女の不安を肩代わりした分、さらに不安がつる。通路側の座席には五十代後半くらいだろうか、大柄の男性が目を閉じて休んでいた。

「どうしたんですか？」

アテンダントに小声で問うと、

「急に体が震えて、“どうしたの” って聞いても答えなくなってしまって・・・」

隣席の中年女性、きっと妻なのだろう、そう答えながら不安気に男性の手を両手でしっかりと握っている。

恐る恐る脈をとる。やや早めだが緊張はよく不整もない。呼吸は多少荒い程度。ちょっと赤ら顔だが熱はなく、けいれんもない。ショック状態は否定され、まずはホッとす。夫人から聞いた名前を問いかけていると、男性は頷くようなかすかな反応を示した。事態は快方の兆し、重篤な脳卒中でもなさそうだ。助かったのは私もだと、肩の荷がぐっと軽くなる。

日ごろ血圧が高く薬を飲んでいる、昨日まで忙しくて睡眠不足だった、先程缶ビール2本にワインを飲んだとは夫人からの情報だ。気圧の低い機内で疲れた体にアルコールが急にまわったのではないか・・・、そんなことを考えながら時々問いかけ続けていると、間もなく男性はかすかに目を開け、「はい」とくぐもった声で返答した。やれやれと一挙に緊張感が消えた。

言葉のもつれや手足の麻痺、それに失禁もなかった。恐らく一過性の脳虚血発作だった

のだろう、もう少しゆったりした空間で体を休めた方がよかったが、あいにくビジネス席も満席とのこと、水分を多めに摂って様子を觀ましようと席に戻ったのだった。

ツアーも何日か経ち、客同士がなんとなくうちとけて雑談するようになった頃、夕食の際、隣に座った中年のAさんが「実は私は皮膚科医ですが・・・」と、自己紹介をしつつ話しかけてきた。

「先日のドクターコールいかがでした？ ドクターコールって嫌ですよ。私は皮膚科だし、救急処置なんて研修医以来したことがありませんからコールには応じませんが・・・。でも、医者なら最低限のことはできるだろうって、世間の人は思っていますよね。以前コールがあったとき、手を挙げる人がいなくて大変肩身の狭い思いをしました。でもそうこうしているうちに、やっと手を挙げてくれた人がいたんです。本当にほっとしましたが、それまでの時間の長く感じられたこと・・・。

しかしですね。さらに身の縮む思いがしたのはその後でした。その人が席を立った後、私の周りにいた中年の女性客がですね、連れの仲間とひそひそ話を始めたんです。どんな病気だろうか、どんな人だろうか。そんな噂話は聞き流せましたが、その後の言葉がきつかった。

“あの医者、どうしてもっと早く手を挙げなかったんだろう、遅いよね” って・・・。

一般の人もそう感じていたんですね。自分の正体がバレたら何と言われるだろうかと思ったら、もう心臓がドキドキしちゃって・・・、別にバレることはないのに、しばらくは居眠りのフリしてじっとしていました。今回も手を挙げてくれた人がいたので本当に助かりました。ありがとうございました」

「そう、ご同業だったんですか。まあ、よろしく」

仕事を離れた単なるツアー客同士、別に“よろしく”もないのだが、同業でコールのストレスを共有していたとなれば、“袖触れ合うも多少の縁”より親近感が強まる。しかし、先日のコールですぐに手を挙げなかったことに負い目を感じていた私は、ありがとうといわれても実感はなかった。

「そう、ドクターコールは手を挙げるも地獄、挙げないも地獄ですね。今回のコール、応じるかどうか、私も随分と迷いました。結局手を挙げはしましたが、先生のお気持ち、痛いほどわかります。先ほどの先生のお話の人も私とまったく同じ気持ちだったんでしょうね。多分、今回も乗客の中には何故もっと早く手を挙げなかったのかと、内心想った人がいたかもしれません。正直言って、先生も遅いって感じられませんでしたか？

まあそれはともかく、いずれにしても手を挙げたんだから、どうせならもっと早く挙げるべきだったと、後になって反省しましたが、しかし、これはあくまでも結果論で、実際はどうしようどうしようと迷い続けでした。しかし、あの時は本当によかった。患者さん、大したことなかったですから・・・」

旅の空の下であっても、職業意識がAさんをつい先生と呼ばせたことに内心苦笑する。

昔、外科医をしていた私が、「何も知らなくて何もしない田舎の開業医」と自己紹介したのは、「内科医は何でも知り、何もしない。外科医は何も知らず、何でもする。病理医は何でも知り、何でもやってのける。だが、いつも手遅れだ」という小話にかこつけたからだった。

「もちろん、病状が分からないというのが一番のストレスでしたが、狭い場所だけに周りの客の視線がやけに近くに感じられましてね、一挙一動がじっと見つめられているというのも相当のプレッシャーでした。

“世の中で何がカッコイイかといえば、コールに応じてドクターが立ち上がる姿だ”って、これは『深夜特急』ってご存知ですね、バックパッカーのバイブルですが、その著者の沢木耕太郎さんから聞いた言葉ですが、いざ自分がその場に立てば、いやー、カッコイイなんてとんでもない。実際は全く逆でしたね」

はからずも自分の小心さと優柔不断さに対峙させられた一件だったと、そんな心境を語りながら私は以前、旅先で会ったある老外科医を思い出していた。

過去40～50回の海外旅行で、何回かのドクターコールを経験したことがあるという氏は、昔、中国内を夜行列車で旅行中、ドアに指を挟まれた少年に遭遇した。もげそうになった指に対して手ぶらの氏は何もできず、翌朝もう一度診てみると指先は変色し、切断は避けられないのではと思われた。もし受傷後直ちに処置していたなら、あるいは指は助かったかもしれないと、そう反省された氏は以来、縫合セットを常時携帯するようになったという。

ある時、機内で酔って転倒した日本人客の頭部の傷を縫ったことがあったが、乗っていたのが外国の航空会社。コールに応じたら、「Are you a human doctor?」と Animal doctor (獣医) じゃないことをアテンダントに確認された。証明するものはなかったけれど事態は急、その場で直ちに出血のひどい十センチ大の裂傷を縫ったとのこと。感嘆と尊敬の念を抱いた私は、飛行機に乗るときはいつも、「落ちないことと、ドクターコールのないことを祈る」というと、傘寿の老医は表情を変えず穏やかにこう言った。

「ドクターコールなんてそんなにあるものじゃあない。1200～1300回のフライトに1回くらいだそう。それより飛行機が落ちないことを祈るなんて、とんでもない。私はこの年になって生命保険は終わっちゃったし、入れるのは旅行保険だけだ。それとてあなたのように1億円なんて高額なものにはもう入れない。でもね、落ちればポックリ死、しかも1千万くらいはもらえる。ポケットマネーとして老妻への最高のプレゼントじゃあないか」

ちなみに、その老医とは標高3500mのヒマラヤ山中・チベット文化圏のラダック地方を旅したときに知り合ったが、氏には肺気腫の持病があった。ちょっとでも急いで歩けば正常の人でも息が切れる高地なのに、肺機能が落ちた氏は指先につけた酸素濃度計を見ながら、ゆっくり歩きながらもすべての行程をこなしたのだった。

「今、酸素濃度89%、外来で患者さんがこの数値だったら入院ものだね」

肩で息をしながら他人事のように淡々としゃべる老医は、肺気腫という不治の病の他に、もちろんこちらは治したくもなく、また治りたくもない病だろうが、“旅の病い”という不治の病も持っていたのだった。